



歩みを止めずに

四街道市立四街道中学校校長 櫻井 比呂樹



1 はじめに

コロナ禍の春も3度目を迎え、学校での教育活動への様々な制限や、式典を含め行事等の縮小も続いている現状がある。本校もまた例外ではなく、「日常の学びを如何に保障していくか。」GIGAスクール構想に基づいたICTの効果的な活用なども含めて、手立ての構築に苦労している感がある。しかし手立てはあくまでも手立てであり、校長として教育の目的、本質を見据え、学校経営を行っていく必要があることを感じている。本校は、特別支援学級4学級も含めて23学級、全校生徒667名の規模を有している。かつては、落ち着いている学校、学力も比較的高い学校と周囲から見られることもあった。しかし、ここ数年間において、特に学力の格差をはじめとして、SNSのトラブルやいじめ、不登校などの生徒指導上の課題や、さらに虐待等の養育上の課題が顕在化してきている。本校ではその改善を図るためには、9か年の系統的な指導が必要でること、さらに、規範意識の醸成や、本校の校訓でもある「自律・貢献」の精神を育成することが必要と考えて、コロナ禍にあっても「小中一貫教育の推進」と「道徳教育の追求」を柱に据え、継続的に取り組んでいる。以下紹介したい。

2 小中一貫教育の推進

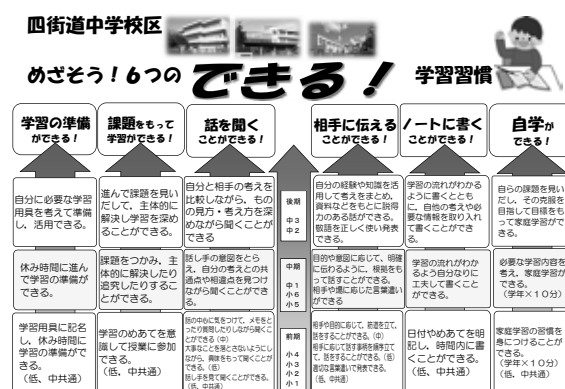
本市では、市教育委員会の重要施策として平成30年度から市内全中学校区で小中一貫教育を実施している。本校でも本学区の地域性、

特に市内で最大規模の小・中学校を抱えている学区として、基盤づくりを以下のような手順で進めた。

はじめに、子供たちの学びと育ちの現状と課題について明らかにすること。次に本校と学区2小学校の教育目標を確認し、目指すべき「15歳の姿」を具体的に設定すること。最後に「15歳の姿」を具現化するために学習面と生活面について行動目標を設定すること。その結果として、本学区では次の具体的な取組を行うこととした。

(1)学習指導の充実

- ①全国学力・学習状況調査の分析結果を活用した授業改善
- ②小中合同会議による9年間の系統性に配慮した指導計画の作成
- ③発達段階に即した学習習慣6項目の設定



学習習慣6項目

(2)生活指導の充実

- ①9年間を一体的に捉えた系統的な生活指導の実施。
- ②発達段階に即した生活習慣6項目の設定



生活習慣 6 項目

(3)教職員の共通理解

- ①各学校と小中合同推進委員会、小中合同研修等を通じて小中一貫教育の意義とねらいを徹底する。
- ②授業交流、相互授業参観を実施し小中学校教職員の相互理解と交流を図る。

3 道徳教育の追究

(1)教材資料の工夫

生徒たちが考え議論する道徳を実践するために、生徒自身が課題を適切に把握し、また、それに対していかに自分事として捉えるかが鍵となる。そこで、まず生徒の関心を高めるために、事前調査の結果や他教科との関連内容を導入として扱い、教材に関連する動画資料等も使用することで、生徒が課題を具体的に理解し、道徳的価値により迫れるようにしている。

(2)思考を深めさせる工夫

議論を活発化させるためには、生徒の思考を促すことが求められる。そのため、生徒が自分自身と向き合い、考えを深めるような手立てが大切となる。そこで、思考整理ツールの活用や、板書提示の工夫などにより、生徒の考えや意見を可視化し、自分自身の考えを客観的に捉えたり、自分とは異なる他者の意見を取り入れたりすることで様々な視点から

物事を捉えながら思考を巡らすことも期待している。

(3)内省を促すための工夫

自己を見つめ直し、よりよい生き方をしようとする心情を育てるためには終末での振り返り、生徒に授業を通して深まったことや新たな気づきに触れさせながら、自分自身の考えを記述させることが必要である。本校ではそれらを学級通信等にも掲載し、生徒同士が互いの意見を共有できるように工夫し、様々な考えや価値観に触れた後に再度自己を見つめ直すことで、道徳的価値について考えを深めるようにしている。



全校道德の授業

4 おわりに

コロナ禍がいつ収束するのかは、今現在ではまだ見通しはもてない。ともすると、「あれもできない。」「これは無理。」という声が挙がることも多い。もちろん、国、県また市から示されたガイドライン等に沿って学校の経営をしていくことは言うまでもない。しかし、3回目の春を迎えた今こそ、「手立て」を打つことだけに終始することなく、目指す学校に近づけるために必要な実践を行うことが必要であると考えている。いずれコロナ禍が収束した時に、コロナ禍当時の校長がどのようなビジョンをもって学校経営を行っていたかが問われるような気がしてならない。



思いをつなぐ

学校を支える

～子どもたちのためにワンチームであるために～

流山市立南部中学校教頭 たかはし えりこ 高橋 絵里子



1 はじめに

「子どもたちのためにワンチームであること」、これが学校教育で最も重要だと考える。新しい時代に求められる確かな学力を育むために、子どもたちに関わる全ての人が、校長の学校経営方針の下、一丸となって教育を進めていく必要がある。学校、職員、保護者、地域が同じ目的のために協力することで教育活動が大きく前進することを、これまでの赴任校で経験してきた。学校の職員が一枚岩となり、さらに保護者や地域と一緒に教育活動を行っていけるよう、「子どもたちのために」という共通の思いをつなぐ教頭となり、職務にあたりたいと考えている。

2 実践の中から見えてきたこと

管理職選考試験の際、教頭としてまず取り組みたいことに、「指導力向上のために協働し、磨き合える職員集団づくり」「切れ目のない指導・支援につながる児童生徒理解」「地域を巻き込んだ教育活動」を挙げた。昨年度、新任教頭として着任した際に、「校長を補佐し、校務を整理する」ことも手探りで模索する状況の中、自分らしくできることは何なのか考え、まずは動いてみることにした。

(1)「指導力向上のために協働し、磨き合える職員集団づくり」

研修や会議は、教員同士をつなぐ大切な時間である。「生徒のために」との思いは同じでも、やり方や伝え方のちょっとした違いについて確認し、軌道修正する場がないと、お

互いに認め合うどころか批判めいた意見が飛び交うことがある。それを克服するため、研修や会議の方法を工夫することで、様々な考えを持つ教員の思いの方向をそろえていくことができ、目的達成のための有効な手段の提案も期待できる。何よりも、一体感を生みモチベーションが上がる。具体的には、教科指導に関わる研修以外にも、いじめ防止対策、教育相談、特別支援教育、不登校や虐待など、生徒に関わる全ての内容において、職員会議や全体研修だけでなく、部会や臨時の会議をこまめに開催し、関係者で議論して進めていくように心を砕いた。また、指導主事、特別支援教育アドバイザー、市のスクールソーシャルワーカー、スクールロイヤー、児童相談所相談員等を招き、積極的に外部からの客観的かつ専門的な助言をもらうことにも努めた。なぜなら小集団での研修や会議は、教員に「自分ごと」としての自覚と責任を持たせることにつながっているからである。今後も、職員同士が協働し、磨き合える有効な時間になるよう、研修や会議の意味を捉え、開催方法に工夫を加えていきたい。そして、専門的な考えを持てるようになった教員が、別の場面でそれを生かし、知識や経験を効率的に広めていける体制を確立していきたい。

(2)「切れ目のない指導・支援につながる生徒理解」

教頭職に就く前の2年間、市教委指導課指導主事として就学相談を担当し、児童生徒が本来持っている力を最大限発揮できる就学先

の決定のために、子育てに不安を抱える保護者に寄り添いつつ相談を進めた。その中で必要に迫られ、特別支援教育について多くのことを学ぶ中で、知れば知るほど自分の無知を実感する日々だった。しかし、それが現在の仕事に、実にたくさんのつながりや広がりをもたらしていると実感している。

さて、本校は全校生徒750人を超える大規模校であり、毎日たくさんの相談が持ち込まれる。生徒指導や保護者対応とともに、支援を要する生徒や保護者からの相談も多い。要支援生徒数は年々増加しており、全職員が理解を深め、全校体制でその支援にあたる必要がある。それぞれの良さを認め、課題を理解し、適切な支援ができるようにすることで、学校は、どの子にとっても安心して過ごすことができる場となる。そのために、校内での情報共有や進級時の引継ぎを確実に行うこと、それを周知すること、そして全職員で見守り適切に育てることを中心に体制作りを進めている。特に、教育相談部会では毎回非常に多くのケースが取り上げられる。これは、教員の意識が高く、小さな気付きを大切に、情報共有する体制ができている証拠である。現在本校では、担任だけが問題の全てを抱え込んでしまうことはないと考えている。

境界の難しい生徒指導部会との連携や、現代の生徒が抱える複雑な問題への対応等、今後解決していくべき課題はある。しかし、切れ目のない指導・支援につながる生徒理解をさらに進め、個を大切にしながら集団を導くことができる職員集団であるように、教頭として、これまでの経験を踏まえて信念を持って職員をリードしていく。

(3)「地域を巻き込んだ教育活動」

流山市では、令和元年度から学校運営協議会（コミュニティ・スクール）の設置を進めており、令和6年度末までに市内全校に設置

される。本校は、現在その準備段階にある。4年目を迎える地域学校協働本部は、「できる人が・できる時に・できることを」を合い言葉に、部活動支援をはじめ、図書室ボランティア、みどりボランティア、カーテン洗濯ボランティア、と一年を通じて学校支援コーディネーターを中心として機能しており、保護者や地域の協力を得てこそその学校を実感している。地域と学校をつなぐために、調整役として教頭が果たす役割は重要であるものの、自分一人で行き届くのではなく、他の職員でもできるようにすること、一緒にやりたいと実感できるようにすること、そして取り組みが続くよう確実に後任につないでいく。

また、学校評価委員会を開催し、地域の方から、ICT教育の推進やホームページの有効活用に対する期待など、様々な御意見をいただいた。流山市で1人1台端末の整備が完了し、教員のICTを使った指導力は着実に向上している。保護者や地域が知りたい情報は何か適切に把握し、時期を逃さず情報を発信して、地域や保護者に安心と期待を持ち続けてもらうことは、教頭の大切な務めであると改めて感じた。学校を支援してくれる地域との関わりの中で、子どもたちが生き生きと活動し、地域の活性化につながるよう、教頭としてコミュニケーションを大切にしながら、地域を巻き込んだ大きなワンチームになれる学校づくりを目指す。

3 おわりに

今回の執筆にあたり、教頭職に就く前に思い描いていた姿と現在の自分の姿を比較し、初心に返ることができた。今も周囲に支えられてばかりだが、子どもたちに関わる全ての人をつなぐことができるよう今後も力を尽くし、校長の目指す学校像の実現に貢献したい。



高め合う学校風土づくり

袖ヶ浦市立奈良輪小学校教諭 しばさき 柴崎 まさのり 昌紀



児童の成長のために、職員が日々の実践について語り合ったり、悩みを共有したりしながら教師としての腕を高めていく、そんな学校風土の職場を目指している。そのために実施した取組をまとめる。

1 「ゆとり感のある職場環境」の構築

職員間で情報共有する「ゆとり」を作り出すために、次の取り組みを行った。

(1) 文書の「Excel化」によるデータの共有

「Excel化」したデータを共有することで、職員がそれぞれで入力作業をしたり文書を作成したりする業務が減少した。

(2) GIGAタブレット活用促進の工夫

Microsoft Teamsの環境作りやGIGAタブレット活用マニュアル・実践事例の共有をいち早く行ったことで、GIGAタブレットの活用が促進され、「以前よりも効率的・効果的な授業ができるようになった」という声が聞かれるようになった。

(3) 「欠席連絡システム」の作成

「マイクロソフトGIGAスクールパッケージ」を参考に、欠席連絡の電話対応を自動化するシステムを作成したことで、朝の忙しい時間の電話対応が大幅に減少した。

2 「子供を支援するシステム」の構築

生徒指導・特別支援・教育相談等、児童に関わる全ての案件についての支援方針を協議する「ケース会議」という仕組みを作った。ケース会議には次のような利点がある。

(1) 支援対象児童の把握がしやすい

支援対象児童の情報をExcelで共有するこ

とで、全体像の把握や一人一人の月ごとの変化を確認しやすくなった。

(2) 方針の決定が早い

生徒指導・特別支援・教育相談の各担当が会議に参加するため、案件に合った対応方針を即座に決めることができた。

(3) 定期開催による確実な進展

ケース会議を月2回定期開催することで、着実に問題解決へと進めることができた。

3 「チームで支えるシステム」の構築

学年主任や専科教員を中心に、若年層教員を必要に応じてサポートするシステムを作った。以下の取組と若年層教員自身の努力によって、学級経営や授業が安定した。

(1) 専科によるサポート

若年層教員の学級の専科授業を増やし、専科教員による授業規律の整えを行った。

(2) 参観による研修時間の確保

授業参観による研修の場を専科授業の裏に設定した。若年層教員は専科の授業や他学年の授業を積極的に参観することで、児童への対応の仕方や授業技術を学ぶことができた。

(3) 若年層教員にリーダーを任せ支える

学年で活動する行事では、児童全体を動かす役を若年層教員に積極的に任せ、体験させた。修正点があれば学年主任が適宜助言した。

本校はここ5年間で児童数が急激に増え、403名だった児童数が現在691名となっている。学校規模の増大・新型コロナウイルス感染症拡大・若年層教員の育成等課題は多いが、目指す学校風土に向けて力を尽くしたい。



「担任」として 大切にしていきたいこと

いすみ市立大原中学校教諭 おおがね じゅん 大鐘 潤



教師として2年目となる今年度、初めて学級担任を務めることとなった。昨年度は2学年の副担任を務める中で、担任として働く先生方の姿を間近で見ることができ、「担任とは何か」について深く学ぶことができた。その経験を踏まえ、今年度は学級担任として、以下の二つのことを大切にしていきたいと思っている。

一つ目は「気付くこと」である。学校生活では、人間関係や学習に関する問題が生じることがある。その原因の一つとして、誰にも相談できず、生徒が日々のストレスや悩みを一人で抱え込むことが挙げられる。そういった悩みや不安を解消するため、私はなるべく生徒に寄り添えるようにし、コミュニケーションを積極的に取るようにしていきたいと思う。また日頃から生徒のことをよく観察することで、普段とは違う仕草や表情などの変化から生徒が抱える「見えない悩み」をいち早く発見し、早期に対応していきたいと考えている。

二つ目は「一人一人を大切にすること」である。「十人十色」という言葉があるように生徒一人一人に違った考え方や個性がある。私は教師として生徒を導く上で、まず一人一人の考えをしっかりと聞き、その意思を尊重していきたい。また、将来に向けて生徒のもつ個性を伸ばしていけるように促しつつ、短所は克服できるように適切に指導していきたい。



教師が手本となる

県立市原特別支援学校教諭 さくま ゆうた 佐久間 悠太



長く続いた講師時代を経て、昨年度、夢だった教師になることができた。初任者としての一年は、学級担任を任せられ、学級経営や保護者対応等で悩みや不安もあったが、周囲の方に支えられて務めることができた。また、生徒と一緒に活動に取り組み、成長する姿を間近で見ることができ、教職について本当に良かったと実感する毎日だった。

講師時代の経験から、生徒と接する時に大切にすることが二つある。一つは、教師が手本となり、生徒と共に活動に取り組むことだ。社会生活を過ごしていく上で重要な挨拶やルール遵守等を、言葉で伝えるだけでなく、手本となる言動を生徒たちの前で常に実践してきた。次第に生徒たちの意識が変わり、自ら元気な挨拶をしたり、ルールを守って進んで活動に取り組んだりする姿が多く見られるようになった。もう一つは、生徒の思いや考えを引き出すために「待つ」ということだ。生徒からの発言や発信を待つことにより、生徒自身の思いや考えを引き出すことができ、生徒が自分から行動に移していく姿を見ることができた。これからもこの二点を大切にしていきたい。

初任者研修でたくさんのことを学んだ。しかし、一年間の実践を経た今、特別支援教育や障害特性についての知識や理解が足りないと改めて感じている。今後も、研修や研究に積極的に取り組み、力を付け、本県の子供たちのために力を発揮していきたい。



自ら学び、互いに高め合う児童の育成 ～ICTを効果的に活用した学びを通して～

船橋市立二宮小学校教諭 にしかわ こうたろう
西川 幸太郎



1 はじめに

これからの時代を生きる子供たちには、情報や情報技術を主体的に選択して活用していく力が求められている。本校は、昨年度から船橋市の研究指定校として、これに取り組んだ。実態調査から、自ら計画を立てて学習に取り組むことや、自分の考えを周りに伝えることが十分でないことがわかった。そこで、直面する課題を乗り越えて生涯に渡って学び続ける力を育むため、研究主題を「自ら学び、互いに高め合う児童の育成～ICTを効果的に活用した学びを通して～」とした。以下、研究主任として取り組んだ初年度の研究について紹介する。

2 研究の実際

昨年度は、各学年、自閉症・情緒障害及び知的障害特別支援学級、言語障害通級指導教室でICTを活用した授業実践に取り組んだ。

第1学年	国語科書写「かん字の学しゅう」
第2学年	国語科「さけの一生をせつめいしよう」
第3学年	理科「音を出して調べよう」
第4学年	算数科「変わり方」
第5学年	社会科「わたしたちの生活と環境」
第6学年	外国語科「We all live on the Earth.」
自閉症・情緒障害 特別支援学級	自立活動 「人とよりよく付き合うためには」
知的障害 特別支援学級	生活単元学習 「劇を発表しよう～ピーターパン～」
言語障害 通級指導教室	オンライン通級指導 「吃音の冰山」で今の心の中をみつめてみよう

(1)第1学年 国語科書写



文字のポイントとなる部分を指でなぞることで、文字の形が明確化され、正しい

文字を書こうとする意識をもつ児童が増えた。また、自分のペースに合わせて、何度も挑戦していた。

(2)第2学年 国語科



カメラ機能を活用して、さけの一生を説明する動画を録画させた。児童は、録画

しては見直し、撮り直すことができ、進んで学習に向かっていた。

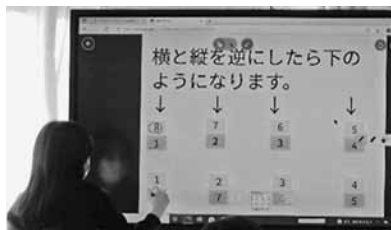
(3)第3学年 理科



ロイロノート
の共有ノート機能を用いて結果を整理し、比較させた。対話を通

して班の結果をまとめることができ、同時に他の班の結果も集まるため、全班の結果から考察したり、結果の妥当性・信頼性を高めたことができた。

(4)第4学年 算数科



電子黒板に映した学習カードに、発表する児童が数字や矢印などを

書き加えながら説明することで、考えを深めていくことができた。皆に考えが伝わらないと感じた児童の中には、図を補足して説明する児童もいた。

(5)第5学年 社会科



個々に設定した課題の解決に向けて1人1台端末の持ち帰りを活用し、自宅での調べ学習に取り組ませた。どの児童も調べ学習に課題意識をもって意欲的に取り組むことができた。

どの児童も調べ学習に課題意識をもって意欲的に取り組むことができた。

(6)第6学年 外国語科



学習したことをロイロノートに蓄積させ、資料を並び替えたり、取捨選択したりすることで自らの課題を把握させた。学習した英単語や表現、ALTの発音動画などを全体で共有できるようにしたことで、自らの課題に合わせて活用する姿が見られた。

学習したことをロイロノートに蓄積させ、資料を並び替えたり、取捨選択したりすることで自らの課題を把握させた。学習した英単語や表現、ALTの発音動画などを全体で共有できるようにしたことで、自らの課題に合わせて活用する姿が見られた。

(7)言語障害通級指導教室

主訴が吃音の口腔内の筋力を高めるトレーニングを必要としない児童を対象にオンラインでの吃音の学習を行った。記入したことに色をつけたり、付箋紙を貼りつけたりすることができ、考えを整理する上で効果的だった。

(8)自閉症・情緒障害特別支援学級 自立活動



事前に撮影した動画から本時のねらいにせまる場面を提示したり、言葉や行動を

電子黒板に書き込んだりすることで自分事となる学習問題を設定できるようにした。

(9)知的障害特別支援学級 生活単元学習



自分の作品を見ながら工夫したところを伝えたり、友達の良いところを見付け

たりすることができた。どの児童も満足し、互いの良さを認め合うことができた。

3 おわりに

1人1台端末をはじめとするICT環境が整備されて1年が経過した。年度当初は、どの職員も不安を抱えており、深い霧の中を進んでいるようであった。しかし、現在ではどの学級でも当たり前のようにICTを活用している。ICT機器の操作が得意な職員や児童だけの力ではこのような姿にはならなかっただろう。まさに児童と職員が一体となり「チーム二宮小」として取り組んだ成果だと考える。

いまだ課題は多いが、どんな小さな成果でも積み重ねることで「もっとやってみよう」と前を向くことができる。これは、児童も職員も同じである。今後も児童と職員が自ら学び、互いに高め合っていく二宮小学校を目指し、校内研究を推進していきたい。



国語科の授業における ICTの活用

銚子市立第一中学校教諭 かねきよ 兼清 もとのり 扶教



1 はじめに

国語の学習はICTと関連させにくいと以前の私は考えていた。漢字練習、文章の読み取り、古典学習と、どのようにICTを活用すればよいか、頭を悩ませていた。校内にタブレット端末が整備され、いよいよ授業で活用していく時期に入った。日々の授業で失敗を重ねながら、少しずつ活用の仕方を検討することができた。まだまだ改善の余地は残っているが、私がこれまでに実践してきたものを紹介していきたい。国語科でのICT活用に悩んでいる方の一助となれば幸いである。

2 詩の学習とタイピング練習

現在、スマートフォンの普及により、小中学生でも自分の端末を所持している子供は少なくない。そして、子供たちの学習能力の高さには、改めて驚かされる。SNSでの発信やウェブ検索をする際の文字入力の手速は、われわれ大人よりも子供たちの方が速いのではないかと思うほどである。

しかし、それはスマートフォンの文字入力「フリック入力」を採用しているためで、「キーボード入力」となると、普段からPCを利用している生徒以外は、困難を感じるようである。現在、音声入力も進化してきているが、まだまだ「キーボード入力」を習得することは必要であろう。そこで、まずは教科書の本文を用いて、タイピング練習を行うことを実践してみた。

詩の学習を行う際には、その詩にふさわし

い情景を想像させ、実際にタブレット端末で写真を撮ったり、著作権について指導しながら、画像をインターネットより引用したりして、ひとつの作品に仕上げるのである。



本文があるものを入力するため、正確な入力ができるかのチェックもしやすく、タイピングのスピードを自身で確認することもできる。定期的の実施していくことで、キーボード入力に慣れさせることができた。

3 音読・朗読練習とカメラ・録音ソフト

古典の学習では、歴史的仮名遣いに慣れ、独特のリズムを習得することが大切である。朗読CDを用いて、生徒に古典独特のリズムを聴かせるといった場面は、各学年で共通して取り組むことではないかと思う。この活動に、カメラや録音ソフトを使い、音読・朗読を録画・録音し、自分で聞き比べるということを取り入れた。

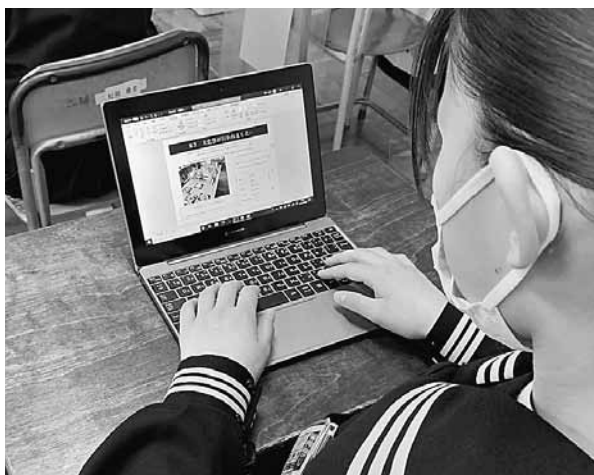
保健体育科では、自分の動きを映像で確認するということを数年前から取り組んでいる。

これと同様に、自分の声や読み方を振り返ることによって、主体的に読み方を改善できるようになった。朗読には人物の心情を読み取ることが不可欠であるが、読み方を模倣することから心情に気付くこともあるのではないかと思う。音読・朗読の技術向上に伴い、発表の場での自信につなげていきたい。

4 取材・書く、そして発信へ

インターネットの普及により、誰でも気軽に発信することが可能となっている。インターネットの匿名性により、安易な発言や、フェイクニュースなどの間違った情報も多くなっている。このような社会の中で、生徒自身が何気なく行った発信により、取り返しのつかない事態に陥らないよう、発信する情報を十分に検討することを指導していかなければならない。このことは学校生活の様々な場面で行う必要があるが、国語科として、より責任感を持って指導していくことが望まれるのではないだろうか。

自分自身が見たこと、聞いたこと、感じたことを、目的意識を持って書く。そして、多くの人に読んでもらうためには、ホームページが最適である。そこで、日常の学校生活や、行事での様子などを学校のホームページに載せることを目的にした授業を行った。



生徒が発信したい情報は、部活動の成果や行事の様子であり、どれも自分や友達の頑張りを伝えるものであった。だからこそ、取材にしても、文章を書くことに対しても、主体的に取り組むことができた。これまで、模造紙にまとめていたことを、タブレット端末を用いて行うことで、体裁の変更が容易になり、デザインや書体にもこだわって作成する様子が見られた。こうした態度は、次の書く意欲にもつながるものであろう。また、表記の誤りについては、スペルチェック機能が働くため、事前に修正をすることができるともタブレット端末を活用するメリットである。

5 ビデオ会議ソフトを用いた交流

新型コロナウイルスの発生により、これまでできていた学習活動の多くが制限され、交流活動も実施することが難しくなっている。しかし、社会ではビデオ会議ソフトがこれまで以上に活用され、オンラインでの授業や研修、行事参加が日常化してきている。

国語の授業で行う意見交流も、ビデオ会議ソフトを用いて行うことで、こうした社会に対応できる生徒を育てることができる。オンラインでも可能なこと、実際に会って話すことの重要性、それぞれを考える機会にしていきたい。

6 おわりに

国語科の学習でICTを活用していくために、教師自身が端末やソフトウェアの使い方に慣れていくことが必要であるのは言うまでもない。ソフトウェアは日々進化し続けている。新しいものを恐れず、とにかく使ってみるといったチャレンジの精神をもって、子供と一緒に学んでいけたらと思う。